

新約聖書における聖餐 ——救済史的視点からの概観——

山崎ランサム和彦

序

聖餐に関して現存する最古の記述は、使徒パウロが紀元 50 年代後半に記した、コリント人への第一の手紙の中に見出される。その中でパウロは聖餐のもつ意味について次のように述べている。「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」(1 コリント 11:26)。ここでパウロは、イエス・キリストを信じる者たちがパンと杯を分かち合うこの営みは、「主の死」つまりイエスの十字架の死という過去のできごとを告げ知らせるものであるという。しかし、イエスの十字架は、そこに至るイスラエルの歴史を抜きにしては到底理解することはできない。同時にパウロの聖餐理解には、「主が来られるまで」、つまり再臨への希望という側面も見られる。すなわち、新約聖書における聖餐は、過去と未来に向かう二つのベクトルを持っており、旧約聖書に記録されているイスラエルの歴史から、イエス・キリストの来臨、そして終末へと至る一連の救済史の流れの中で聖餐を捉えることが決定的に重要である。そこで、まず聖餐の旧約的起源を探ることから始めていくことにしたい。

I. 遠過去：イスラエルの物語

A. 出エジプト

旧約聖書に記録されているイスラエルの歴史の中で、最大の救済のできごとは出エジプトであると言えることができる。モーセに率いられたイスラエルがエジプトにおける苦役から神によって奇跡的に解放されたこの事件は、その後の民族のアイデンティティの基盤となった¹。この出エジプトのできごとは、新約聖書の聖餐の起源を考える際にも中心的な重要性を持っている。

1. 過越

イスラエルが実際にエジプトを脱出する発端となったのが過越のできごとである。神はモーセとアロンを通して、イスラエルの全会衆に対し、家ごとに傷のない一歳の雄羊を屠り、その血を家の門柱とかもいに塗り、その肉を、種を入れないパンと苦菜と共に食べるように命じられた。その夜、主はエジプトの地にあるすべての家の初子を滅ぼされたが、門柱とかもいに血のついているイスラエル人の家々は過ぎ越されたという（出エジプト 12：1-28）。

主は「この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを主への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。」（14節）と命じられた。これ以降、イスラエルは毎年ニサンの月の14日に過越の祭りをを行い、主がなされた民族の救いのみわざを想起していくことになる²。

2. マナ

イスラエルがエジプトから脱出する際の食物が過越の小羊であったとすれば、彼らが約束の地を目指して荒野を旅した間に与えられた食物はマナであった。

¹ たとえば申命 26：5-10。

² その後の歴史の中で、過越の祭りは次第に変化していく。スコットは中間時代に起こった変化を、①手続きの細部における変化、②再解釈と意味の附加、③過越と種を入れないパンの祭りととの区別の増大、の3点を挙げている。J・ジュリアス・スコット『中間時代のユダヤ世界』（いのちのことば社、2007年）158-59頁。

神は天からマナを降らせ、イスラエルはカナンの地に達するまで40年間、マナを食べた（出エジプト 16：35）。マナはイスラエルに対する神のいつくしみと養いの表現である（ネヘミヤ 9：15、20-21）。マナは天から超自然的に与えられた食物で、詩篇 78：25の七十人訳では「天使のパン」と呼ばれている。パウロはイスラエルの食べたマナを「御霊の食べ物」と呼んだ（1コリント 10：3）。

3. 神の御前での祝宴

神がイスラエルをエジプトから救い出した目的は、彼らをご自分の民とし、またご自身が彼らの神となることであった（出エジプト 6：7）。神はシナイ山で民に契約の律法を与えられたが、その契約の批准のため、全焼のいけにえと和解のいけにえが捧げられ、その血が民に振りかけられた（24：1-8）。契約締結の締めくくりは、神の御前で開かれた祝宴であった。「神はイスラエル人の指導者たちに手を下されなかつたので、彼らは神を見、しかも飲み食いをした。」

（11節）。

このように、イスラエルの救済的事件である出エジプトのナラティヴにおいて、食事というモチーフが繰り返し表れることが注目される。人間の生命維持のために不可欠な食事という行為が、神による救済のできごとと結びつけられているのは偶然ではない。神は人間にいのちを与え、また養い続けてくださるお方である。同時に、特に過越とシナイ山での祝宴においては、犠牲のモチーフも見られる。

B. その他の旧約的背景

聖餐の旧約的背景として、たしかに出エジプトは重要な位置を占めているが、それがすべてではない。いくつか重要と思われるものだけを取りあげる。

小林信雄によると、主の晩餐の最も直接的なルーツは、旧約聖書における神の国の祝宴である³。預言書には、終わりの日に神の国で催されるメシヤ的祝宴についての言及が見られる（イザヤ 25：6-8、55：1-2、65：11-16、エゼキ

³ 小林信雄『主の晩餐』（日本キリスト教団出版局、1999年）24頁。

エル 39:17-20、ゼパニヤ 1:7)⁴。これは終末における最終的な救済の祝福と喜びを表現する特徴的なイメージである。この祝宴に招かれるのはイスラエルの民だけでなく、その食卓は地上のすべての民族に開かれている (イザヤ 25:6)。それと同時に、神に背いた者はその宴から締め出されることが語られる (イザヤ 65:13)。つまり、この祝宴は神の救いと同時にさばきの表現であり、そこには開放性と閉鎖性が共に見られる⁵。

イザヤ 52:13-53:12 に描かれている苦難のしもべの姿は、最後の晩餐の重要な旧約的背景を提供している。ここで主のしもべはほふられる羊に喩えられ (53:7)、そのいのちを多くの人の罪を贖うために捨てる (10-12 節。マタイ 26:28、マルコ 14:24 参照)。イエスが間近に迫ったご自分の死について述べられた時、イザヤ書の苦難のしもべを念頭に置かれていた可能性がある⁶。

旧約聖書におけるイスラエルが抱えていた根本的な問題は、神がシナイ山で与えられた契約を守ることができないということであった。エレミヤ書では、神がシナイ契約に替えて新しい契約を与えるという終末的希望が語られる (エレミヤ 31:31-34)。

C. まとめ

イスラエルの民族的アイデンティティの土台をなしているのは、出エジプトのできごとである。それを通してイスラエルは神によって苦難から救い出され、その契約の民となった。その後のイスラエルの苦難の歴史の中で、ふたたび出エジプトのような救いが待ち望まれた。しかしそのことが起こるためには、民

⁴ この主題は、中間時代のユダヤ教諸文書によってさらに発展していくことになる。1 エノク 62:14、2 パルク 29:3-8 等を参照。

⁵ 小林『主の晩餐』28-30 頁。エゼキエル 39:17 以下では、神の勝利の祝宴では裁きを受けて殺された者たちの血と肉が振る舞われるというイメージが見られる。

⁶ I. Howard Marshall, *Last Supper and Lord's Supper* (Exeter: Paternoster, 1980), p.89. 民のための贖いとして義人が殉教するという概念は、中間時代の 4 マカバイ 6:28-29、17:21-22 などにも見られる (ibid., pp.88-89)。Dunn はイエスご自身がイザヤ 53 章を意識しておられたと断言することは避けるが、この聖句について熟考された可能性は残している。James D. G. Dunn, *Jesus Remembered* (Grand Rapids: Eerdmans, 2003), p.817.

の罪の赦し、そして新しい契約が必要とされた。

II. 近過去: イエスの物語

パウロは初代教会で行われていた聖餐を、イエスが十字架にかかる前夜に弟子たちと持たれた最後の晩餐に起源を持つものと明確に位置づけている (1 コリント 11:23-26)。しかし、最後の晩餐はイエスのミニストリー全体の背景を抜きにして理解することはできない。そしてイエスの生涯は、イスラエルの歴史のクライマックスでもあった。

A. 公生涯におけるイエスと人々との食事

食事はイエスの公生涯を通して頻繁に登場する重要なモチーフである。古代世界において、食卓の交わりは重要な社会的意味を持っており、誰と食事をするかということはその本人の評判を左右するものであった。その意味で、イエスがパリサイ人のような社会的に確立した地位を持つ人々だけでなく (ルカ 7:36、11:37-38、14:1)、あえて社会の中の周縁的な世界に生きていた人々 (いわゆる「罪人」、取税人、娼婦等) と繰り返し食事を共にされた (マルコ 2:15-17 並行、14:3 並行、ルカ 15:1-2、19:1-10) ことは重要である。このような「罪人」との食事の交わりは、彼らを悔い改めに導き、神へ立ち返らせるためのものであった (ルカ 5:31-32)。イエスが弟子たちと持たれた最後の晩餐は、このような食事の交わりの終着点と言って良い⁷。

B. 終末におけるメシヤ的祝宴についてのイエスの教え

イエスは様々な人々と食事を共にされただけでなく、その教えの中で食事のイメージをしばしば取りあげられた。多くの場合、その教えは単なる食事ではなく、終末における神の国のメシヤ的祝宴についてのものである (マタイ 8:11 並行、ルカ 14:15-24 並行、22:29-30)。

⁷ Hans-Josef Klauck, "Lord's Supper," *The Anchor Yale Bible Dictionary* (New York: Doubleday, 1996), vol. 4, p.370.

C. 供食の奇跡

イエスが行われた数多くの奇跡の中で、最後の晩餐との関係が大きいと思われるのは、五千人の供食と四千人の供食である。これらの奇跡には少なくとも二つの重要な旧約的な背景を求めることができる。

まず、これらの奇跡は出エジプト時のマナの奇跡を思い起こさせる。イエスご自身が、福音書において新しいモーセとして描かれていることはしばしば指摘されている⁸。五千人の供食が行われたのは「寂しい ἔρημος」所であったことが繰り返し語られるが（マタイ 14：13、15、マルコ 6：32、35、ルカ 9：12）、このギリシア語は「荒野」とも訳すことのできることであり、荒野でイスラエルがマナによって養われたできごとを想起させる⁹。そして、ヨハネははっきりと、この奇跡が出エジプトを記念する過越の時期に行われたことを述べている（ヨハネ 6：4）。

イエスの時代のユダヤ人の間では、終わりの時代に到来するメシヤは、モーセがしたのと同じく天からマナを降らせることが期待されていた¹⁰。イエスの供食の奇跡は当時のユダヤ人の群衆によってまさにこのように解釈された可能性は大きい。事実、この奇跡を見た彼らはイエスを「王にしよう」としたのである（ヨハネ 6：15）。

さらに、預言者エリヤとエリシャも人々に食物を奇跡的に提供したことが記されている（1列王 17：8-16、2列王 4：1-7、42-44）。特にエリシャによって増やされたパンを人々が食べてなお余した（2列王 4：43-44）という記述は、イエスによる供食とのつながりを強く感じさせる（マタイ 14：20、マルコ 6：43、ルカ 9：17、ヨハネ 6：13 と比較せよ）。

同時に、この箇所と最後の晩餐との結び付きも無視することはできない。パ

⁸ たとえば、ルカ 9：31 では、変貌山上に現れたモーセとエリヤが、イエスがエルサレムで成し遂げようとしておられる ἔξοδος（文字通りには出エジプト）について語っている。

⁹ マルコ 6：39 では「青草」への言及があり、その場所が文字通りの荒野でなかったことは、福音書記者たちが「荒野」ということばを象徴的な意味で用いていた可能性を示唆する。

¹⁰ 2パルク 29：8。Brant Pitre, *Jesus and the Jewish Roots of the Eucharist* (New York: Doubleday, 2011), pp.90-92.

ンや魚を「取る」「祝福・感謝する」「裂く」「与える」というイエスの所作（マルコ 6：41、8：6 以下および並行箇所）は、最後の晩餐においても見られるものである（マルコ 14：22 並行）。

五千人の供食の奇跡は四福音書すべてに記録されているのに対し（マタイ 14：13-21、マルコ 6：30-44、ルカ 9：10-17、ヨハネ 6：1-15）、四千人の供食はマタイ 15：32-38 とマルコ 8：1-10 にしか記録されていない。五千人の供食は主としてユダヤ人を対象に行われた奇跡であったのに対し、四千人の供食にあずかった群衆の多くは異邦人であったと思われる¹¹。この二つの奇跡は、イエスがユダヤ人だけでなく異邦人にもいのちを与える主であることを表し、後の異邦人宣教を暗示するものと言える。そして、五千人の供食の後に四千人の供食が行われたという、マタイとマルコ両福音書に共通したできごとの順序も、福音はまずイスラエルに伝えられ、その後異邦人へ向かうという新約聖書のパターンに沿うものと言える。

D. 最後の晩餐

聖餐の起源として最も重要なのは、疑いなくイエスと弟子たちの最後の晩餐である。この食事は、イエスが公生涯における一連の食事の交わりのクライマックスをなすだけでなく、イエスの受難という文脈の中で行われた食事であるということが重要である。

1. 最後の晩餐と過越の食事

イエスが十字架にかけられたのは金曜日であったが、その前日の木曜日の夜にイエスが弟子たちと最後の食事を共にされたということは、四福音書すべてに共通している。しかし、その食事が過越の食事であったかどうかについては、議論が分かれている。

共観福音書は一致して、最後の晩餐が過越の食事であったことを明記している（マタイ 26：17、マルコ 14：12、ルカ 22：7-8）。ところがヨハネ福音書で

¹¹ 小林『主の晩餐』112-113頁を参照。四千人の供食が行われたのはデカポリス地方であった（マルコ 7：31）。